

北の火の山

15

■アトサヌプリ・摩周岳

「この湖水の出口は全くなく、ただ湖底からの水が西別川の水源に地下で通じていて、泉となってわき出ししているという。このように考えられるのは、湖水が百日のひでり、雪どけ水の頃にも、増減することがないからであろう」

松浦武四郎は『久摺日誌』で摩周湖の水についてこう書いている。土地の古老らの長年の観察に基づく推論だが、水位が夏季や融雪期にもほぼ一定ということも記しており、短期間の調査としては見事な見聞録といえよう。

摩周湖には出口(流出川)ばかりか、流入川もない。環境庁国立公害研究所(現国立環境研究所)の研究報告第126号(一九九〇年発行)で、堀内清司曰大文学部教授(陸水学)らがまとめた「摩周湖の水収支的特色」によれば、湖水は蒸発と地下水流出、降雨と流域からの流入(地下及び地表)というバランスの上に成り立つ。

堀内教授らは一九八二年から八八年まで初めて集中的、連続的な水位調査をした。その結果、八七年までの間に水位は徐々に下がり、合計で約一・四倍

低下した。八四年の降水量は、平年の約二〇%分少なく、こうした降水量の変化が、長期の水位低下をもたらすという、微妙なバランスで支えられていることが推論された。

また、標高約三五一メートルの湖水位を境に、浸出速度が大きく変わり、湖水位がそれより高くなるほど降雨があると、流出速度も増えることなどが分かった。

湧水ちゃん

ただ堀内教授によると、湖水研究は、水位の面をとってもまだ緒についたばかりだ。このシリーズの「水質観測」の項でも紹介した

が、人を寄せ付けない険しい自然条件や、自然保護のために、できるだけ手を加えないという方針があるためだ。

地域住民は「久摺日誌」のように、西別川上流の水産庁さけ・まず資源管理センター虹別事業所の「北湧水池」など摩周湖周辺のわき水を、摩周湖からの「伏流水」と見ている。だが堀内教授は「また学問的な裏付け



摩周湖解くカギ子の名に

がされていないのが実情だ」と指摘する。

その仮説の解明に、大学の卒業論文として八七年に取り組んだ人がいる。千葉市川市に住む会社員内田豊さん(三三)だ。日

大文学部応用地学科に在学中に、堀内教授の指導で「摩周湖の水収支と周辺湧水に関する研究」と題して「わき水」を調べ

摩周湖の伏流水と見られる水産庁さけ・まず資源管理センター虹別事業所の「北湧水池」。視察しているのは勝井義雄札幌学院大教授(07年10月)

と同種だと推論した。

堀内教授は、内田さんの研究を評価しつつ「西別川の水量は、摩周湖からの浸出量よりかなり多い。だから内田くんの推論のように、摩周湖の湖水も浸出しているが、摩周外輪山などの水も相当含まれていることを考慮する必要がある。ほかの地点の湧水も、摩周湖の水だけではとても足りない」と指摘した。

内田さんの勤務先は、山一証券のシステム関連の子会社だった。親会社の経営破たんに伴って倒産したが、システム部門は実績があり、同種の会社が設立され再出発することができた。悪夢がやっと薄らぎつつある。

卒論はいまも最高の思い出だといいい、こう語った。

「湖水に特殊な物質を投入して、湧水が湖水かどうかを調べる方法もありますが、環境上は好ましくない。結局、私の卒論のような間接的な調査方法しかないようです。卒業を控えみんなが就職活動をしていた時期に、ひとり摩周湖周辺で、わき水とにらみ合っていたのは忘れられません。今年四歳になった長男の名は「湧水」といいます」